

特集1

能越の杉で建てる板倉

能越の震災復興プロジェクト

case1

岸田木材 / 里山建築研究所 /
富山大学 / ミツホ建設

case2

製材所だからこそその板倉の住まい
松井製材所

特集2

やまが板倉 プロジェクト

新古今社

2025
11

ITAKURA
HOUSE

いたくら

能登半島と富山県西部を指す能越地域。
そこに植生する杉を用いて板倉の家づくりに取り組む2例を紹介します。
1つは、2024年に発生した能登半島地震の復興に取り組むプロジェクトです。
氷見を拠点に、立ち上げの背景とプロジェクト第一号となった建設中の住宅を通して、
どのように復興を目指していくのかお伝えします。
もう1つは、南砺市で創業約100年となる製材所が手掛ける板倉です。
製材から建設まで一貫して手掛ける板倉の家づくりをお伝えします。

特集 1

能越の杉で 建てる板倉



雪化粧した氷見の里山の杉林。
撮影／安藤邦廣 (p1～3)

特集 1

能越の杉で建てる板倉

02

case 1

能越の震災復興プロジェクト
板倉による
能越の震災復興プロジェクトをすすめる

座談会

持続可能な体制で地域の木と人で
板倉の復興住宅をつくる

元の家を部材を可能な限り再利用
古材と新材を取り合わせた復興住宅
「荒井邸」(富山県氷見市)

14

山と町をつなぐ仕事

江戸から続く氷見の杉を伝えていきたい
山とユーザーをつなぐ通訳としての役割
岸田木材 (富山県氷見市)

20

case 2

板倉のすべての木材加工が可能な製材所
だからこそ家づくりに取り組む
松井製材所 (富山県南砺市)

ていねいな材の使い分けで
富山の杉の良さを余すところなく引き出す
「小矢部の家」(富山県小矢部市)

新連載

28

四季咲きの板倉——徒然ならぬ日暮らし 第一回 冬

特集 2

30

里山の「なつかしい未来」につなぐ
やまが板倉プロジェクト

「山鹿の家 (市原幸夫邸)」(熊本県山鹿市)

41

板倉の家 実績調査結果報告

44

2024年度準耐火構造の板倉構法の技術開発経過報告

47

板倉の家は私達がつくれます

COVER STORY

再建を支える板倉



「荒井邸」

氷見で能登半島地震に被災した、建設中の復興住宅。元を家の梁や瓦、建具など可能な限り再利用し、地域の材であるひみ里山杉などの新材と取り合わせている。



「ひみ里山杉の林」

伐採しているものは樹齢70年ほど。生育が早くことからかつてはボカ杉と呼ばれ、油分が多くしなりに強い特徴を活かして江戸時代には造船用に使われていた。

写真2点／齋藤さだむ

能越の 震災復興 プロジェクト

荒井邸の建て方。マツ
梁を再利用した。

「板倉による能越の震災復興プロジェクトをすすめる
文／安藤邦廣（日本板倉建築協会代表理事）」

2024年1月1日に能登半島で大地震が発生した。その揺れは遠く離れた関東でも強く長く続いた。それは13年前の東日本大震災の揺れに似ていて大きな被害がでると感じた。翌朝、報道をみるに被災状況は予想以上に酷く、復興には国をあげて長期にわたる取り組みが必要となることは明らかであった。

能登半島の民家調査や漆の文化の研究を通して長く親交のある輪島の建築家・高木信治さんに早速電話連絡をとった。幸い高木さんの自宅は、大きな被災はまぬがれたが、輪島の中心市街地は地震とその後起きた火災よって壊滅状態であるとのことであった。そしてしばらくは金沢の避難所に移らざるを得ない状況であった。高木さんは、2011年の東日本大震災において、板倉の仮設住宅を福島県内に約200戸あまり建設した際に、能登ヒバを使った風呂の蓋と簀子を全戸分支援支給いただいた。その素晴らしい香りと耐水性にすぐれた材質で被災者

に感謝された記憶が蘇る。今回被災して逆の立場となった高木さんや能登の地域の人々に恩返しをしなければならないのである。

日本板倉建築協会は、東日本大震災で板倉の仮設住宅を建設したことを契機に、その建設に協力した仲間たちで2014年に設立された。その創立10周年の記念式典が2024年7月に開催された。その席上で能登半島地震復興支援に、会の総力をあげて取り組むことを決議した。その後、能登半島では道路やインフラの被害が甚大で復興は思うように進まず、全半壊した家屋の解体ができない厳しい状況である。仮設住宅は建設されたが、復興住宅の建設は見通しがたたない、現地への視察や支援の方針も立てられない状況であった。震災後3ヵ月経過した頃、被災地の水見に住する荒井美穂子さんから住宅再建について相談したいという連絡があった。東日本大震災の際、南三陸町で板倉の復興住宅にとも

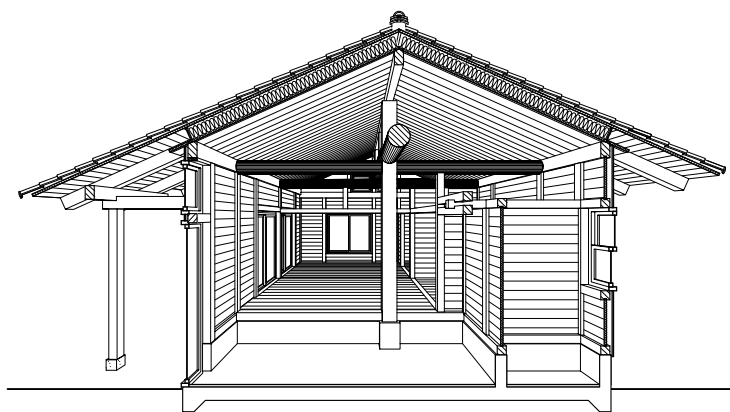
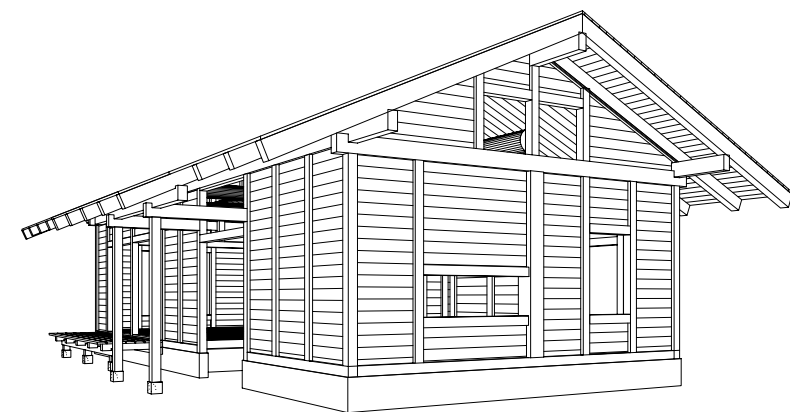
に取り組んだ自伐型林業家の渡邊啓さんから事情は聞いており、荒井さんもその推進協会の事務局に関わっているということであった。これを聞いて能登半島の付け根である水見には、「水見のボカ杉」と呼ばれる帆柱や造船材として江戸時代より名高い杉の産地があり、またそれが明治以降になると日本中の電柱として役立ったということを知っていたので、その杉を用いて板倉の復興住宅をつくる、これが復興支援の見取り図として浮かんだ。荒井さんはその水見に住み、そこに住宅再建を希望している。加えて自伐型林業で地域産材を活用したいという考えであり、板倉構法でつくることに両者とも迷いはなかった。

さっそく旧知の水見の岸田木材の岸田穀さんと、筑波大学での

教え子にあたる富山市で建設業を営むミヅホ建設の長森稔さんに連絡をとり、賛同が得られた。こうして二人の協力でのプロジェクトが実現に向かった。

水見は富山湾に面して能登半島の付け根にある。珠洲や輪島等の奥能登地域とは古来より海路を通じて木材等の物資の流通は密接に結ばれていた。今回の震災においても甚大な被害を受けている奥能登地域の復興支援の拠点として水見は重要な位置にある。

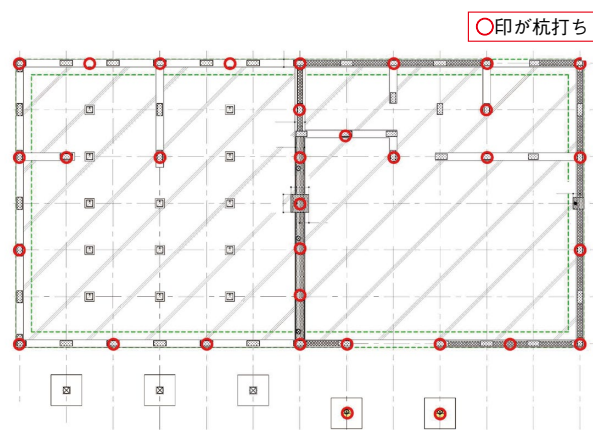
荒井さんの家の再建を通じて板倉の復興住宅の木材供給と建設体制の整備をする。能登の半壊した民家には、堅牢な木組み、能登瓦で葺かれた屋根、漆で塗られた建具や造作等、歴史文化的価値の高いものが多い。それらの改修が重要な課題となる。また古材や能登瓦や建具などの再利用を図って板倉の家づくりを進める。能登の地域文化の継承と地場産業の振興につなげたい。そして震災に加えて豪雨災害で大きく傷ついた能登の里山の美しい風景が蘇ること、それが板倉による能越の震災復興プロジェクトの目的である。



断面パース 1/100



右／土間から広間方向を見る。中央に立つ大黒柱は、荒井さんの知り合いの自伐型林業家の山から伐り出されたヒノキを加工した。
左／右写真の見返し。水回りや台所など、床面積の半分を土間が占める、コンパクトな平屋だ。



荒井邸の敷地は軟弱なため、今後の災害に備えて杭打ちによる地盤改良を行なった。図面の赤い部分に、長さ4メートルのスギ丸太が打ち込まれ、その上にベタ基礎が打設される。仕組みとしては、杭を支持層まで届かせて建物を支えるのではない。軟弱な地盤に摩擦杭として効かせ、基礎を筏（いかだ）のように浮かべている。



荒井さんの家では、天井板に隠されていた3間のマツ梁が見つかった。能登ではかつて梁にマツを使っていたそうだが、松枯れ病が蔓延している現在、良いマツ材は入手困難だ。荒井邸は3間×6間で設計されていたので、この梁をそのまま再利用できた。元の家に比べて半分以下の床面積で、二拠点居住の必要最小限の規模となった。

古材と新材の取り合わせには、力量のある大工の力が欠かせなかった。新材同士の接合部はプレカット加工だが、曲がりやねじれのある古材は機械では加工

小ぶりの板倉構法の復興住宅が、氷見市の郊外に建設中だ。建て主である荒井美穂子さんの元の家は、能登半島地震で半壊した。それを板倉構法で再建したいという意志を反映した住宅だ。日本板倉建築協会では、東

元の家部材を可能な限り再利用 古材と新材を取り合わせた復興住宅

荒井邸（富山県氷見市）



上／熊本県山鹿市。上内田川の流域の里山。
下／施主の市原幸夫さん。自身が持つ杉山で。



＊ ＊



山から伐り出した木は、地元の製材所で挽いてもらう。足りない材もここで供給。

熊本県山鹿で、農業の活性化を目指して農産物の生産から加工・販売まで一貫して手掛ける事業を実践してきた施主。終の棲家づくりでは、山から木を伐り出すところから始めました。それはこの家づくりに留まらず、この地域の未来の世代へつなげてゆくプロジェクトに発展しています。



市原さんが手掛ける事業の基盤である農業。



農業から加工・販売まで一貫体制をとることを目的に開業したフランス菓子「ricca」。

特集2

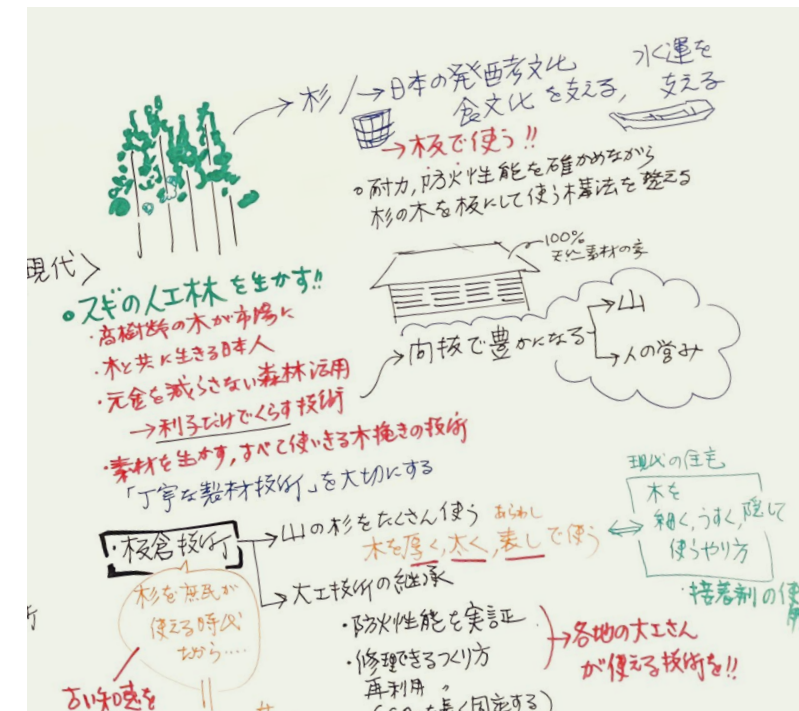
里山の「なつかしい未来」につなぐ やまが板倉プロジェクト



＊ ＊
若き林業家が指揮を担ったスギの伐り出し。30年後を考えて、間伐を兼ねた伐採を行った。

杉の伐採（間伐）

全伐しなかったので幹に陽があたらず完全な葉枯らしとは言えないが、搬出時の重量に2割程度の軽量化の効果があつた。製材後の色・艶・香りにも効果が認められた。伐採から搬出までにかかった費用は約64万円であった。



板倉の家実績調査結果報告

日本板倉建築協会においてこれまで取得している国土交通大臣認定を用いた板倉構法の実用化後約20年が経過し、構法の現時点での普及の程度や取り組み実態を把握するために、「板倉の家実績調査」(アンケート調査)を行った。

板倉構法講習会が初開催より間もなく20年を迎えるにあたり、講習会受講者に配布している板倉構法の認定書を使用した板倉の家の普及状況について実績調査を行うことにより、現在の普及状況を把握することが第一の目的である。

また、これまでの普及状況から今後のさらなる普及へ向けた構法の課題や課題解決策を提示し、今後の取り組みの方向性を示すことが第二の目的である。

認定書を配布した講習会受講者数は調査時において473社、調査対象として日本板倉建築協会団体会員7社、個人会員71社、賛助会員11社、元会員14社、板倉構法講習会一般受講者で電話調査により1棟以上の実績が確認された37社、合計140社を対象に行い、回答数は39社であった。アンケート調査期間は2024年6月12日である。調査から得られた結果

1.普及の地域の地域性、期間

現代板倉構法の普及状況は全国的に見ると偏りがあることが把握できた。普及地域は関東、中部、近畿と考えることができ、その他地域を未普及地域に大別することができる。

また、板倉構法に取り組んでいた期間は10年以上となっている会社が多く、新規参入する会社が少なくなっている現状が明らかになった。

図1-1 図1-2 図1-3

2.課題

はじめに「坪単価」最も課題としてあがっていることからコストダウンの方策が求められていることがわかる。図2-2に各社の平均的な坪単価を示す。80～100万円が最も多く、また100万円超の会社もある。この結果から2021年3月から始まったウッドショックの影響や、円安の影響等による建築資材の高騰について影響を、板倉構法に取り組んでいる各社についても大いに受けていることがわかる。そのような中80万円以下を維持している会社も

年数	会社数
1年未満	1
1～5年	5
5～10年	8
10年以上	25

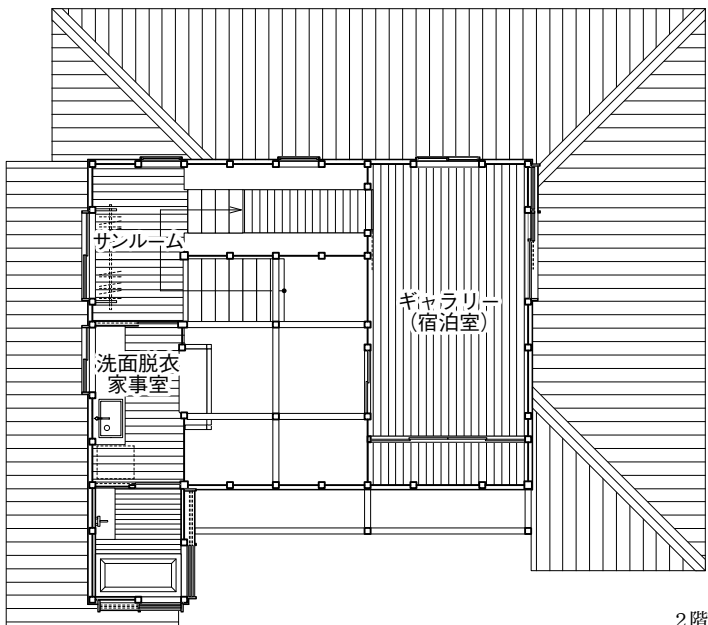
取り組んだ様数	会社数
0	4
1-5	12
6-10	3
11-20	6
21-30	5
31-40	1
41-50	1
51-100	2
101-200	1
201-	2

[illegible]

※1
清水邦義（九州大学大学院農学研究院・准教授）の研究については、木の家健康を研究する会（<https://www.kitokenko.com>）の「健康に良い自然素材の木の家」を参照ください。



いま、ここに居る里山の暮らし
松倉の家



1F 1/150

この図は、1階の平面図を示しています。各部屋の寸法は以下の通りです。

- 玄関: 2.0m x 1.0m
- ホール: 2.0m x 1.0m
- 収納: 1.0m x 1.0m
- 倉庫: 4.0m x 2.0m
- リビング: 4.0m x 2.0m
- 書斎: 2.0m x 1.0m
- キッチン: 2.0m x 1.0m
- 寝室: 3.0m x 2.0m
- バスルーム: 1.0m x 1.0m
- トイレ: 1.0m x 1.0m
- 洗面: 1.0m x 1.0m
- テラス: 2.0m x 1.0m

各部屋の寸法は、図中の数字と単位（m）で示されています。また、各部屋の形状や配置も図中に示されています。

株式会社新古今社
熊本市中央区小沢町51
tel.096-288-2983
fax.096-288-2984

定価1000円(本体910円+税)
JAPAN ITAKURA HOUSE ASSOCIATION

ITAKURA HOUSE

